

教育研究業績書

2018年05月14日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：布谷 麻耶

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	臨床看護学, 慢性病看護学
学位	最終学歴
博士(看護学)	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 患者体験を重視した事後課題の提示	2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の准教授として担当の「成人看護学Ⅱ(慢性期)」(専門科目、3年次配当)において、慢性疾患患者が病気と共に生きる生活への理解を促すため、授業後の課題として血糖自己測定、鼻カニューレの長時間装着等の体験を踏まえたレポートの提出を求めた。学生からは、「実際に自分で体験して、患者の煩わしさや大変さがわかった」等の意見や感想が得られた。
2. 慢性期看護に関わる理論についてのディスカッション	2015年9月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の准教授として担当の「生涯発達看護学概論A」において、修士課程に在籍する院生を対象に、慢性疾患を有する患者の療養行動を理解するための理論として、セルフケア、セルフマネジメント、行動分析理論を中心に、まずその概要を説明し、実際にこれらの理論に基づく実践を臨床の場で行うにあたっての適用可能性や予想される効果、限界や課題について、ディスカッションを行っている。
3. 修士課程学生への副指導	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程に在籍する院生の副指導教官として、研究テーマの明確化から研究計画書立案、データの分析、論文の作成と発表に至るまでの一連の研究プロセスにかかわり、指導を行っている。 これまでに副指導を担当した修士論文題目は、「慢性創傷患者の疼痛評価—創傷処置時の疼痛に焦点を当てて—」、「小児科外来に通院する20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に向けた準備状況」である。
4. 慢性疾患患者への看護を考えるうえでの漫画事例の活用	2014年9月2016年2月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学実践論Ⅱ(セルフケアを支える看護)」(専門科目、2年次配当)において、慢性疾患患者と家族への看護について病みの軌跡理論に基づいて考えるうえで、潰瘍性大腸炎と診断された主人公が病いと向き合うプロセスが描かれた漫画を事例として活用し、授業を行った。授業後の学生からのリアクション・ペーパーからは、「文章ではなく漫画による事例だったので実際の患者の状況や心情がわかりやすかった」等の高い評価が得られた。
5. グループ学習の実践	2012年12月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学概論Ⅱ」(専門科目、1年次配当)において、慢性期の看護を考えるための中範囲理論としてセルフケアとセルフマネジメントの概念を紹介した。その後で、学生を5,6名のグループに分け、潰瘍性大腸炎患者の事例を提示し、患者のセルフケア能力のアセスメント、さらに必要な看護援助についての検討をグループごとに行うように促した。まとめの発表では、各グループで検討したことが報告され、学生全体で学びを共有することができた。
6. 演習における振り返りシートの活用	2012年10月2016年2月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「実践基礎論Ⅱ(生きていくしくみを支える看護方法)」(専門科目、1年次配当)において、学生の演習での学びを言語化し、今後の学習へつなげていけるように、振り返りシートを作成し配布した。演習後、各自で看護師役と患者役、それぞれを実施して気づいた点や改善を要する点などをシートに記入させ、翌朝提出とした。振り返りシートは成績評価の対象とはしなかったが、毎回ほぼ全員の学生から提出があり、実際に体験してみて気づいた点、さらにそこからどのような配慮や援助が必要と考えたのが、具体的に記述されていた。
7. E-learningを活用した事前学習課題の提示	2012年10月2016年2月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「実践基礎論Ⅱ(生きていくしくみを支える看護方法)」(専門科目、1年次配当)において、学生の事前学習を促すために、各回の授業の1週間前に課題をE-learning上にアップし、各自で次回の授業までに取り組むように促した。授業では、事前課題の実施状況を確認するとともに、その内容について解説を行った。授業後は課題を回収し、評価後、各学生へ返却した。授業評価に関する学生アンケートでは、予習や講義資料の項目で高い評価が得られた。

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
8. デモンストレーションおよび体験学習の導入	2010年10月2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）において、輸液施行中の術後患者の寝衣交換の演習を、はじめに教員によるデモンストレーションを行い、その後、学生同士で患者役、看護師役に分かれて実施した。その結果、教員によるデモンストレーションなしで学生同士で演習を行っていた場合と比べ、看護師役の学生はスムーズに援助が実施でき、患者役の学生も実際に術後の患者がドレーンやルート等によりどれだけ身体の動きが制限されるのか、学ぶことができた。また、学生から「デモンストレーションを見てイメージがついた」等の意見が挙げられた。
9. 看護技術習得のためのシミュレーションモデルの活用	2010年10月2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）、「看護学演習Ⅰ」（専門科目、3年次配当）において、学生が実践に近いかたちで技術が習得できるように心肺蘇生人形や異物除去人形、吸引モデル等のモデルを活用した演習を行った。学生は、心肺蘇生や異物除去、気管吸引の技術を実際に人形を通して体験することで、自分ができた技術とできなかった、あるいは不十分であった技術が明確になり、今後の課題設定ができた。学生アンケートの結果からは「実践に近いかたちで学べた」等の高評価が得られた。
10. 学生による自己評価と教員、病棟スタッフによる他者評価の活用	2009年10月2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）において、術後患者に対するフィジカル・アセスメントと輸液施行中の患者への清拭・寝衣交換の実施にあたって、学生による自己評価表と教員または病棟スタッフによる他者評価表を作成し、学生へのフィードバックの際に活用した。一人の学生につき実習前・中・後で各1回ずつ、計3回評価を行った。その結果、他者評価を行う教員と病棟スタッフ間の指導に対する共通認識が深まり、学生側では自己の課題が明確になり、実習前後で学生の技術の向上がみられた。
11. ディスカッションの導入	2008年5月2010年8月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）において、クリティカル看護の分野における専門性、教育的機能、マネジメント、継続看護について学ぶ目的で、日々テーマを決め学生同士でディスカッションする時間を設定した。ICU、手術室の外回り・器械出し看護の専門性、クリニカルラダーに沿った教育、人・物・時間・環境のマネジメント、手術室・ICU・病棟・外来間での継続看護の実際について学んだことをディスカッションすることで体験の意味付けにとどまらず、学生同士で学びを共有でき、臨床現場をみる視野が広がった。
12. 学内演習における小人数教育の実践	2008年4月2011年3月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）、「成人看護技術論」（専門科目、3年次配当）、「看護学演習Ⅰ」（専門科目、3年次配当）、「看護学演習ⅡB」（専門科目、4年次配当）において実践した。学生2～5人のグループに教員が1人つき、脳神経や眼・耳・鼻、呼吸器、循環器、腹部のフィジカル・アセスメント、肝臓がんで腹水の溜まった患者を事例とした寝衣交換等の技術指導を行った。その結果、教員は学生一人一人の細かい手技まで確認でき、指導が行えた。学生は、気軽に教員に質問でき、フィジカル・アセスメント能力および援助技術が向上した。
13. フィジカル・アセスメント技術習得のためのシミュレーションモデルの活用	2008年10月2011年2月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）において、学生が術後の患者の状態をイメージし、適切な援助が行えるように、フィジカル・アセスメントモデルを用いた演習を臨地実習開始前に行った。創があり、ドレーンやルートの挿入された術後患者を想定した演習を行うことで、実際に術後の患者を受け持った際、学生のリアリティショックが少なく、バイタルサインの測定や水分出入の観察、アセスメント等がスムーズに行えた。
2 作成した教科書、教材		
1. 慢性疾患患者への看護過程の展開事例	2017年5月	武庫川女子大学看護学部の准教授として担当の「成人看護学実習（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、実際に慢性疾患患者を受け持ち、看護過程を展開するため、その展開例として2型糖尿病患者の事例を取り上げ、実習で用いる記録様式に患者の基礎情報、病態関連図、情報の整理、アセスメント、統合と問題の抽出、看護計画立案までの過程を示す資料を作成した。
2. 慢性期看護演習資料の作成	2017年4月	武庫川女子大学看護学部の准教授として担当の「成人看護学Ⅱ（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、慢性期にある患者を看護するにあたり必要な知識と技術を正確に理解し、患者の療養生活をイメージしながら個々の患者に必要な援助を考える力を養うために、授業で使用する資料を作成した。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
3. 成人看護学実習（慢性期）の実習要項および記録様式の作成	2017年3月	武庫川女子大学看護学部の准教授として担当の「成人看護学実習（慢性期）」（専門科目、3年次配当）において、学生が受け持ち患者の看護過程を展開するうえで使用する記録様式とその記載例を作成した。また、本実習が円滑に行えるように実習要項を作成した。
4. 健康教育の講義資料の作成	2015年10月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「健康支援方法論」（専門科目、4年次配当）において、健康教育プログラムの実際として、PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者の口腔保健行動の把握から口腔ケアプログラムの開発と評価について説明する資料を作成した。
5. 慢性期看護学実習における記録様式および指導要領の作成	2014年3月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学実習Ⅲ（セルフケアを支える看護）」（専門科目、3年次配当）において、学生が受け持ち患者の看護過程を展開するうえで使用する記録様式とその記載例を作成した。また、本実習が円滑に行えるように担当教員および臨地実習指導者向けの実習指導要領を作成した。
6. 慢性期看護の教材の作成	2013年3月	天理医療大学医療学部看護学科の講師として担当の「共通基盤看護学実践Ⅱ（セルフケアを支える看護）」（専門科目、2年次配当）において、慢性病をもつ人と家族への看護、肝機能障害を有する患者（主に肝硬変患者）の看護、排泄機能障害を有する患者（主に慢性腎不全患者）の看護、免疫機能障害を有する患者（主に関節リウマチ患者）の看護、認知・感覚・運動機能障害（主に脳血管障害患者）の看護、がん総論、肺がん患者への看護の授業で使用する資料を作成した。
7. 手術室看護の演習用教材の作成	2010年10月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次配当）の中の「手術中の看護」の演習で使用する教材を作成した。手術室での手洗いやガウンテクニック、滅菌手袋の装着方法について具体的な手順を示したチェックリストを作成し、学生2人1組になり、1人の学生がチェックリストを読み上げ、もう1人の学生がそれに沿って実施した。これにより、教員がその都度チェックし、指導を行わなくても、個々の学生が手順通りに実施でき、また演習後に学生が復習する際にも活用された。
8. 成人看護学実習における補助教材の作成	2009年10月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）、「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）において、検査データや手術記録のみかたがわからずに戸惑う学生が多かったため、それらのみかたを図示したプリントを作成した。これを活用したところ、それまでより学生がスムーズに短時間で記録からの情報収集が行えるようになった。また、学生から「記録にある一つ一つの項目の意味やデータのみかたがわかった」等の意見が挙げられた。
9. 実習指導マニュアルの作成	2008年5月	愛知県立大学看護学部看護学科の助教として担当の「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次配当）、「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次配当）において、担当する病棟（消化器外科病棟、手術室、ICU）の特徴を踏まえ、それぞれの実習目標と対応させた学生指導を行う際の具体的方法や内容を記述したマニュアルを作成した。このマニュアルを作成することで、学生が実習目標を達成するために具体的にどのような実習場面で活用できるのか、どのように人・物・時間を調整したらよいか明瞭になり、その結果、学生の学習効果も高まった。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程における教育実践	2017年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科博士後期課程の専任教員（2017年4月から現在に至る）として、「看護エビデンス特論」（共通教育科目、1年次配当）、「特別研究」を担当した。
2. 武庫川女子大学看護学部における教育実践	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の専任教員（2016年4月から現在に至るまで准教授）として、「初期演習（生活と看護）」（基礎教育科目、1年次配当）、「成人看護学Ⅱ（慢性期）」を担当した。
3. 武庫川女子大学看護学部の担任	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部2期生のクラス担任として、前期・後期の担任ガイダンスや学生との個別面談を通して、大学生活における学習面・生活面の相談、助言を行っている。
4. 武庫川女子大学大学院看護学研究科修士課程における教育実践	2015年4月～現在	武庫川女子大学大学院看護学研究科の非常勤講師（2015年4月から2016年3月）、専任教員（2016年4月から現在に至る）として、「生涯発達看護学演習」（専門教育科目、1年次配当）、「生涯発達看護学特論A（成人慢性看護学）」（専門教育科目、1年次配当）、「論理的思考論」（共通教育科目、1年次配当）を担当した。
5. 天理医療大学医療学部看護学科のチューター	2014年4月2016年3月	天理医療大学医療学部看護学部において、毎年約20名の学生のチューターを担当し、学習面や生活面の相談、助言、指導を行った。

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
6. 天理医療大学医療学部看護学科における教育実践	2012年4月2016年3月	天理医療大学医療学部看護学科の専任教員（2012年4月から現在に至るまで講師）として、を「人間関係とコミュニケーション」（総合基礎科目、1年次担当）、「実践基礎論Ⅱ（生きていくしくみを支える看護方法）」（専門科目、1年次担当）、「実践基礎看護学実習（生活を整える看護）」（専門科目、1年次担当）、「共通基盤看護学実践論Ⅱ（セルフケアを支える看護）」（専門科目、2年次担当）、「共通基盤看護学実習Ⅲ（セルフケアを支える看護）」（専門科目、3年次担当）、「共通基盤看護学実習Ⅳ（急性期療養過程を支える看護）」（専門科目、3年次担当）、「健康支援方法論」（専門科目、4年次担当）、「看護実践能力の探求」（専門科目、4年次担当）「総合実習」（専門科目、4年次担当）を担当した。
7. 愛知県立大学看護実践センター看護研究セミナー「看護研究個別指導」講師	2010年9月2011年3月	看護職者の研究活動を支援する目的で企画された愛知県立大学看護実践センターの「看護研究個別指導」において、実際に勤務先の病院で看護研究を行う手術室看護師に対して、本人が立てた研究計画をもとに研究目的の明確化、研究方法の検討、データ収集と分析等、プロセスに沿って個別指導を行った。
8. 看護教員看護教育学研修会「看護のフィジカルアセスメント」講師	2009年8月2010年8月	愛知県下の看護教員や看護職員を対象に教育の場や臨床の場にいる看護職者のフィジカル・アセスメント能力の向上を目標とした研修会に講師として参加し、脳神経系および呼吸器のフィジカル・アセスメントの演習指導を担当した。参加者2人1組になり、患者役・看護師役を交代で実施した。一人の実施に時間をかけ、患者役・看護師役の両方を実際に行うことで、視神経、顔面神経、三叉神経、舌咽神経などの脳神経の診査技術、肺の位置の確認、肺の打診、胸郭の触診、肺の聴診などの技術が習得された。
9. 愛知県立大学看護学部看護学科における教育実践	2008年4月2011年3月	愛知県立大学看護学部看護学科の専任助教として、「成人看護技術論」（専門科目、3年次担当）、「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次担当）、「成人看護学総合実習」（専門科目、4年次担当）、「看護学演習Ⅰ」（専門科目、3年次担当）、「看護学演習ⅡB」（専門科目、4年次担当）、「応用看護技術論：成人」（専門科目、2年次担当）を担当した。
10. 京都大学医学部保健学科における教育実践	2007年4月2008年3月	京都大学医学部保健学科看護学専攻の非常勤講師として担当の「成人看護学急性期実習」（専門科目、3年次担当）において、患者に対する手術侵襲の影響、および侵襲からの身体的、心理的回復を促進する看護の理解と実践ができることを到達目標とし、主に眼科、耳鼻咽喉科領域の看護過程の展開や術後患者の観察・援助についての実習指導を行った。学生が受け持った眼科、耳鼻咽喉科で手術を受ける患者は比較的、手術時間、また在院日数も短い患者が多かったが、手術による侵襲だけでなく、局所・全身麻酔による影響についても学び、退院に向けた患者指導等も実践できた。
11. 「難病等在宅療養者への食生活支援研修会」での講演	2005年6月	神経難病などで在宅で療養する方々への食生活支援のありかたについて検討するために開催された、大阪府北河内7市の医療介護施設に勤務する栄養士、看護師、保健師らを対象とした研修会の場で、本人がこれまで行った、在宅静脈栄養法施行患者のQOLに関する研究の成果について発表し、食生活支援のありかたについて講演した。講演後の参加者へのアンケートから、「静脈栄養法を特別な行為と思わずに日常生活における普段の行為として行いたい」といった療養者が望む声が聴けてよかったなどの意見が寄せられた。
12. 京都府立医科大学付属病院での実習生への指導	2004年5月2006年2月	京都府立医科大学付属病院で勤務していた消化器外科病棟において、「成人看護学外科系実習」（専門科目、3年次担当）の実習生2名に対して、胃がん、大腸がんで手術を受ける患者を実習生の受け持ち患者として、手術前、後の観察やバイタルサインの測定、離床や清拭・寝衣交換等の援助の指導を行った。患者の状態の報告の場面では、観察したことだけでなく、それを踏まえたアセスメントについても報告するように指導したところ、徐々に実習生が自分の考えや援助の方向性を発言するようになり、最終レポートでは実習体験を踏まえた学びについて論理的に述べられていた。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 保健婦免許	2001年4月1日	
2. 看護婦免許	2001年4月1日	
2 特許等		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. ジャーナル編集委員としての活動	2017年4月～現在	武庫川女子大学看護学ジャーナル編集員として、規程や申し合わせ、原稿執筆要項などの見直し、投稿論文の確認と査読者の検討などを行った。
2. 臨地実習委員会委員としての活動	2016年4月～現在	武庫川女子大学看護学部の臨地実習委員として、新入生への抗体価検査の企画・調整・実施・結果報告、ワクチン接種の勧奨などの感染対策を主に担当した。
3. 自己評価委員会担当としての活動	2016年4月～現在	武庫川女子大学の自己評価委員会の担当として、看護学部・看護学研究科の開学以降（2015年度～）の自己評価報告書原案を作成した。また、各委員会・担当の活動報告の取りまとめを行った。
4. 自己点検評価実施委員会委員としての活動	2015年4月2016年3月	天理医療大学の自己点検評価実施委員会の委員として、2014年度年報の作成に向け、大学や教員の教育活動や委員会活動、社会貢献等について評価し、原稿を作成した。主に初年次教育、宣誓式、社会貢献、内部質保証に関する章や節、項目を担当し、原稿を作成した。
5. 宣誓式実行プロジェクト委員としての活動	2015年4月2016年3月	天理医療大学の宣誓式実行プロジェクトの委員として、看護学科2回生後期に学生が看護への思いを一つにし、立派な看護師へと成長することを誓約することを目的に開学時より行われている看護宣誓式の運営、実施、評価に携わった。学生同士で話し合い、運営の係りやメンバーを決め、具体的な内容について検討するように促すとともに、当日に向けてのリハーサルの立会い、助言を行った。終了後は次年度の宣誓式に向けて改善点や継続すべき点について委員で話し合った。
6. 公開講演会実行プロジェクト委員としての活動	2014年4月2016年3月	天理医療大学の公開講演会実行プロジェクトの委員として、年に1回、学内の教職員および学生だけでなく他大学の学生、医療従事者など広く一般に公開される講演会の企画、運営、評価を行った。2015年度は特に参加者に配布するアンケートの作成、準備、集計、評価を担当した。
7. 教員・教育組織能力開発委員会委員としての活動	2014年4月2015年3月	天理医療大学の教員・教育組織能力開発委員会の委員として、学期ごとに実施される学生の授業評価の結果を受け、各科目の担当教員が自らの授業を振り返り、今後の改善策等を記載する教員所見の取りまとめと集計、自由記述欄の分類と要約を行った。また、年度末には学内教員向けのFD活動としてワークショップを企画、実施した。
8. チューター会議委員としての活動	2014年4月2016年3月	天理医療大学のチューター会議の委員として、2014年度は看護学科1回生15名、2015年度は看護学科2回生16名のチューターを担当し、各年の年度初めと前期試験前、後期試験前の計3回、学生との個別面接を実施し、学業や生活上での悩みや困難がないか確認し、相談や助言を行った。また、各学期の試験終了後、所定の単位以上再試験科目がある学生と個別面接を実施し、再試験に向けての学習計画や取り組み状況の確認を行った。さらに、年2回開催されるチューター全体会議および年3回開催される各学科の学年ごとのチューター会議に参加し、担当する学生の状況について報告し、問題点や解決策についてチューター同士で話し合った。
9. 図書委員会委員としての活動	2012年4月2016年3月	天理医療大学の図書委員会の委員として、2011年度は主に、図書館に導入するデータベースの検討や蔵書希望図書の取りまとめを行った。2012年度は図書の廃棄に関する細則の作成に携わるとともに、廃棄対象図書の選定を行った。2013年度以降は蔵書希望図書の選定と取りまとめ、図書委員会に係る規定や細則の見直しを行った。
10. 研究委員会委員としての活動	2012年4月2015年3月	天理医療大学の研究委員会の委員として、2011年度は紀要規定および原稿の執筆要項の作成、公募から査読・編集・発行に至るまでのスケジュール案の作成を行った。また、学内の倫理委員会および研究実施施設の倫理委員会の審査を受けるにあたっての手続きをまとめたマニュアルを作成し、学内教員へ配布した。2012年度は、学内教員を対象とした科学研究費獲得支援プロジェクトを企画するとともに、その中で獲得に向けた自らの体験談を発表した。また、看護に関わる民間の研究助成について調べ、一覧にして学内教員へ配信した。2014年度は、学内教員向けに研究活動を推進するためのリトリート・キックオフプログラムの企画、実施を担当した。
11. 入試委員会委員としての活動	2011年4月2012年3月	天理医療大学設立準備室の入試委員会の委員として、看護学科の推薦入試および一般入試の実施マニュアルの作成、事前の教職員を対象とした説明会の実施、必要物品の準備・確認を行った。入試当日は、グループ・デイスカッションの面接員、個人面接の誘導員を担当した。また、入試終了後、担当教員で会議を開き、改善を要する

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
12. 教務委員会委員としての活動	2011年4月2012年3月	点とその解決策を検討し、その結果を踏まえ、次の入試に向け、実施マニュアルの追加修正を行った。 天理医療大学設立準備室の教務委員会の委員として、進級規定や既修得単位の認定規定などの履修規定(案)の作成に携わるとともに、学生向けの履修ガイドの原稿の作成と校正を行った。 また、2012年度開講科目で使用する教科書の取りまとめを行った。 さらに、新入生を対象とした入学直後の基礎学力を評価するための力試し試験の企画と実施を担当した。
13. 学生委員会委員としての活動	2008年4月2011年3月	愛知県立大学看護学部の学生委員会の委員として、学生生活にかかわる手引きの見直し、新入生オリエンテーション合宿の企画・運営、父兄のキャンパス見学の案内などを行った。また、健康管理担当として学部生と大学院生の健康診断の運営、卒業式などの救護係、実習における感染予防策および感染症、感染・汚染の機会を有する事故発生時の対応策の検討を行った。 また、2008年度は進路支援委員を兼ね、学部生の国家試験対策の説明、就職・大学院への進学相談などにあたった。
4 その他		
1. 日本看護科学学会学術論文奨励賞受賞	2013年12月1日	「クローン病患者への食事指導プログラムの開発と有効性の検証」論文に対して
2. 日本看護研究学会奨励賞受賞	2012年7月1日	「クローン病者の食生活体験のプロセス」論文に対して

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 基礎と臨床がつながる疾患別看護過程 PART2	共	2017年9月	学研メディカル秀潤社	クローン病の原因や症状、治療、一般的な経過について解説した上で、腸閉塞を起こした患者を事例として、情報収集からアセスメント、看護問題の抽出と絞り込み、看護計画の立案、評価までの一連の看護過程の展開について解説した。
2. 新体系看護学全書 経過別成人看護学3 慢性期看護	共	2017年12月	メヂカルフレンド社	第4章 慢性期にある人・家族への看護の「V潰瘍性大腸炎・クローン病」(pp.165-183)の執筆を担当。疾患の概要、潰瘍性大腸炎・クローン病と共にある生活の理解とアセスメント、潰瘍性大腸炎・クローン病と共に生きる人への看護介入、家族へのケアについて執筆した。
3. 基礎と臨床がつながる疾患別看護過程	共	2015年9月	学研メディカル秀潤社	潰瘍性大腸炎の原因や症状、治療、一般的な経過について解説した上で、肛門部に皮膚障害のある患者を事例として、情報収集からアセスメント、看護問題の抽出と絞り込み、看護計画の立案、評価までの一連の看護過程の展開について解説した。
2 学位論文				
1. クローン病者の食生活体験に関する研究	単	2008年3月	大阪大学大学院医学系研究科	クローン病者の食生活体験に焦点を当て、病者が発病後、処方された食事療法にどのように対応しているのか、食事を通じた他者との関わりの中で、どのような問題を抱え、それにどう対応してきたのかを明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて寛解期にあり在宅で生活している成人クローン病患者17名に半構造化面接を行い、データを分析、論文としてまとめた。結果、病者が食事制限と食欲との狭間で、標準的な食事療法から試行錯誤しながら自分に合った食生活スタイルを見出すプロセスが明らかになった。
2. 在宅静脈栄養法施行患者のQuality of Lifeに関連する要因の分析	単	2003年3月	大阪大学大学院医学系研究科	在宅静脈栄養法(HPN)施行患者のQOLには身体・心理・社会的要因が影響を及ぼすものと考え、QOLにプラスまたはマイナスに働くと考えられる変数を選択し因果モデルを考案した。この因果モデルをデータに基づいて検証することを目的に、HPN施行患者27名に質問紙調査を実施した。結果、自覚症状が多くなると不安感が増強し、それがQOLを低下させる方向に影響した。また、活動レベルが良好なことは、自尊心を高め、高い自尊心は仕事への復帰を促し、それがQOLを高める方向に影響した。
3 学術論文				
1. 慢性創傷患者における創傷処置時の疼痛緩和を目指して 痛みを我慢している患者に焦点を当てて	共	2018年3月	日本看護学会論文集：慢性期看護，48号，P.27-30	創傷処置時の疼痛緩和に向けた看護実践への示唆を得るために、実際に創傷処置を受けている慢性創傷患者を対象に、創傷処置の内容や疼痛の程度、疼痛への影響要因や鎮痛剤の使用状況について調査した。結果、対象者15名中11名が処置時に痛みを我慢していた。創傷処置時の疼痛要因としては「傷を擦る、悪い組織をとる」「ガーゼの固着」「創部の洗浄」「創周囲のテープの剥離」を選択回答した割合が高く、これ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. Self-Control Trial: A Qualitative Grounded Theory Study on the Decision-Making Process in Patients with Ulcerative Colitis Who Choose to Use Complementary and Alternative Medicine	単	2018年2月	Journal of Comprehensive Nursing Research and Care, 3, 122, DOI: http://dx.doi.org/jcnrc/2018/122	らは、鎮痛剤使用者においても同様の結果であり、薬理的介入だけでは緩和できない疼痛の存在が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：種村智香、川端京子、布谷麻耶、宮本 撰 潰瘍性大腸炎患者がどのようにして補完代替医療を用いるか否かの決めているのか、その意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、14名の患者に半構造化面接を行い、得られたデータをGrounded Theory Approachの手法に則り分析した。結果、“self-control trial”というコアカテゴリーが見出され、患者の意思決定プロセスには、「体調」、「実行可能性」、「他者からの影響」、「健康を取り戻したいという望み」、「不信」の5つのカテゴリーが含まれていた。
3. Effectiveness of a dietary support program based on behavior analysis approach for patients with Crohn disease(査読付)	単	2017年5月	Gastroenterology Nursing, 40(3), 229-238	クローン病患者の寛解維持と食事満足度向上に繋がる食行動の形成、維持に至るまでの行動変容を導くため、行動分析学的アプローチを組み込んだ食事指導プログラムを開発し、単一グループ前後比較デザインのもと介入研究を行った。参加者13名中11名がプログラムの終了まで参加し、介入により試し体験行動の頻度が増加したのは9名であり、7名がフォローアップ期においても行動を維持していた。疾患が増悪した者はおらず、7名に食事満足度の向上がみられたことから、本プログラムが患者の寛解維持と食事満足度向上に有効であることが示された。
4. クローン病患者の運動の捉え方と影響要因の検討(査読付)	共	2017年3月	日本難病看護学会誌, 第21巻第3号, P. 181-193	クローン病患者にとって運動がどのような効果があるのか、患者と運動との間にどのような影響因子があるのかを明らかにするために、アンケートの自由記載欄に回答のあった103名の記述をコード化し内容分析を行った。結果、運動の効果としては体力の向上と体調維持があり、運動の影響因子としては発病前の運動習慣や運動強度などがあった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：藤本悠、水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、市川奈央子、清水安子
5. 炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択に関する意思決定プロセス(査読付)	共	2016年12月	日本看護科学会誌, 36巻, P. 121-129	炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択に関する意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、Grounded theory approachを用いて、寛解期にある20名の患者に半構造化面接を行い、継続比較分析を行った。結果、患者の意思決定プロセスとして「症状軽減を狙った賭けに出るか否か」というコアカテゴリーが抽出され、患者が治療に伴う利害にどのように重きを置くかによって、治療選択の決断が異なることが示された。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：布谷麻耶、鈴木純恵
6. 進行期卵巣がんの妻と療養を共にした壮年期配偶者の体験—2人の遺族の分析—(査読付)	共	2015年3月	天理医療大学紀要, 3(1), 16-24.	進行期卵巣がん患者の療養過程における壮年期配偶者の体験を明らかにすることを目的に、2名の遺族を対象に半構造化面接を行い、データを質的に分析した。結果、卵巣がんの診断から死まで妻が生きることを支え続ける配偶者の体験が明らかになるとともに、配偶者への長期的な支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
7. 炎症性腸疾患患者を対象としたセルフマネジメント介入の研究動向(査読付)	単	2014年12月	日本難病看護学会誌, 第19巻第2号, P. 201-211	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。
8. 静脈血採血技術を修得するための新人看護職員を対象とした集合研修の評価(査読付)	共	2013年1月	天理医療大学紀要, 第1巻第1号, P. 11-21	新人看護職員と実地指導者が各々の課題を明確にすることを目標に、新人看護職員研修の一環として企画した静脈血採血技術の集合研修を両者の視点から評価することを目的に、自由記載による振り返り用紙の記述内容を質的に分析した。結果、新人看護職員は手技の未熟さ、患者への配慮不足といった実践上の課題を見出し、実地指導者は不十分な個別指導、指導することに対する気負いや緊張といった指導上の課題を見出し、 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者名：布谷麻耶、石田寿子、有田秀子、川口

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
9. クロウン病患者への食事指導プログラムの開発と有効性の検証（査読付）	共	2012年9月	日本看護科学会誌, 第32巻第3号, P.74-84	づる、岡田三枝、高田幸恵、森継知恵美、有田清子 クロウン病患者の寛解維持と食事満足度の向上を目的に食事指導プログラムを開発し、ランダム化比較デザインのもとその有効性を検証した。結果、プログラムを適用した介入群において、試し体験行動が有意に増加した。疾患の増悪はなく、食事満足度に有意な変化はなかった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者名：布谷麻耶、鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀
10. 地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度の開発（査読付）	共	2012年9月	日本看護科学会誌, 第32巻第3号, P.85-95	地域高齢者の保健行動に関連する自己制御力を評価する尺度を開発することを目的に、地域高齢者1,883名を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。さらに、地域高齢者38名に対し、歯磨き行動を維持するプログラムに1ヵ月間参加することを求め、介入前とその1.5ヵ月後に尺度を用いて調査した。結果、自己制御尺度の妥当性と信頼性が確認された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者名：深田順子、鎌倉やよい、坂上貴之、百瀬由美子、布谷麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり
11. クロウン病者がウェブ上で闘病記を綴ることの意味（査読付）	単	2012年12月	日本難病看護学会誌, 第17巻第2号, P.151-162	クロウン病者がウェブ上で綴り、公開している闘病記の実態を明らかにし、病者にとって闘病記が持つ意味について考察することを目的に、162件のブログによる闘病記について分析した。結果、ウェブ上で綴る闘病記には、読者とのコミュニケーションツール、同病者との交流の場、健康状態のモニタリングツールとしての意味が見出され、臨床の場を越えた看護支援の可能性が示唆された。
12. PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者における口腔保健行動に関連する評価尺度の開発（査読付）	共	2011年9月	日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌, 第15巻第2号, P.199-208	高齢者が自立的に実行できる口腔ケアプログラムの開発を目指し、PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた口腔保健行動に関連する評価尺度を開発することを目的に、地域高齢者および同居家族を対象に質問紙調査を郵送法で実施した。分析対象は803名で、因子分析等の結果、口腔保健行動に関連する尺度41項目のうち25項目が選定された。PRECEDEモデルとの適合度は、GFI0.866、AGFI0.837を示し、内的整合性を示す α 係数は尺度全体で0.773であり、評価尺度の妥当性と信頼性は許容範囲であることが確認された。 本人担当部分：計画立案、データ収集を担当。 共著者名：深田順子、鎌倉やよい、百瀬由美子、吹田（布谷）麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり、坂上貴之
13. 周術期患者に対する寝衣交換技術の向上を目指した教育実践（査読付）	共	2011年12月	愛知県立大学看護学部紀要, 第17巻第1号, P.25-32	術後疼痛があり輸液・カテーテル類が挿入されている患者の寝衣交換ができることを目指して、従来の教育方法に加えて寝衣交換に対する学生による自己評価及び教員等による他者評価を形式的に実施し、その効果を学修達成度から明らかにした。結果、学修達成度が「非常に・大体当てはまる」と自己評価した割合が75%以上の項目は、学内演習では9項目、術後患者に初めて寝衣交換を実施した際には0項目、実習終了時では19項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共著者名：深田順子、熊澤友紀、鎌倉やよい、布谷麻耶、榊原由美子、鶴田淳一、山田佳代子、兵藤千草
14. 地域高齢者の口腔保健行動－PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた類型化－（査読付）	共	2010年3月	身体教育医学研究, 第11巻第1号, P.27-35	高齢者が主体的・自立的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階としてヘルスプロモーションの観点から高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにすることを目的にシニアクラブに所属する高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。得られたデータをPRECEDEモデルを基に分類と抽象化を行い、介入の視点を検討した。 本人担当部分：計画立案、データ収集、分析、論文執筆までを担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、百瀬由美子、深田順子、森本紗磨美、横矢ゆかり、藤野あゆみ、坂上貴之、鎌倉やよい
15. 看護基礎教育における周術期の臨床判断力の向上を目指した教育実践（査読付）	共	2010年12月	愛知県立大学看護学部紀要, 第16巻第1号, P.31-39	周術期患者に対するフィジカル・アセスメントに基づいた判断力の向上を目指して、実習におけるフィジカル・アセスメント技術に対し学生による自己評価と教員等による他者評価を実施し、その効果を学修達成度から明らかにした。結果、学修達成度が「非常に・大体当てはまる」の割合が自己・他者評価とも75%以上の項目は、実習初日の学内演習では8項目、臨地実習では9項目、実習終了時では24項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
16. クロウン病者の食生活体験のプロセス（査読付）	共	2009年12月	日本看護研究学会雑誌, 第32巻第5号, P. 19-28	本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。 共著者名：深田順子、熊澤友紀、吹田（布谷）麻耶、鎌倉やよい、竹内麻純、鈴木さおり、兵藤千草 クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クロウン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
17. クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験（査読付）	共	2007年12月	日本難病看護学会誌, 第12巻第2号, P. 147-155	クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クロウン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
18. クロウン病者のQOL研究の現況－1996～2005年－（査読付）	共	2007年12月	日本看護研究学会雑誌, 第30巻第5号, P. 77-82	クロウン病者への看護の質向上に向け、今後必要とされる研究について検討することを目的に、クロウン病者のQOLに関する過去10年間の国内外の文献141件を対象とし、研究方法と内容について分析した。結果、このテーマに関する研究は増加傾向にあり、量的研究が9割以上を占め、データ収集法は既存の尺度を用いた質問紙法が6割を占めていた。さらに、研究内容はQOLの尺度開発に関する研究、QOLの影響要因に関する研究など7種類に分類された。 本人担当部分：文献収集から分析、論文執筆まですべて担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、鈴木純恵
19. 在宅静脈栄養法施行患者のQuality of Lifeに関連する要因の分析（査読付）	共	2004年4月	日本看護研究学会雑誌, 第27巻第1号, P. 107-113	在宅静脈栄養法（HPN）施行患者のQOLには身体・心理・社会的要因が影響を及ぼすものと考え、QOLにプラスまたはマイナスに働くと考えられる変数を選択し因果モデルを考案した。この因果モデルをデータに基づいて検証することを目的に、HPN施行患者27名に質問紙調査を実施した。結果、自覚症状が多くなると不安感が増強し、それがQOLを低下させる方向に影響した。また、活動レベルが良好なことは、自尊心を高め、高い自尊心は仕事への復帰を促し、それがQOLを高める方向に影響した。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共著者：吹田（布谷）麻耶、高木洋治

その他

1. 学会ゲストスピーカー

2. 学会発表

1. IBD治療決定に際しての看護師の関与	単	2018年2月9日	第14回日本消化管学会総会学術集会（於京王プラザホテル）	これまでに行った炎症性腸疾患患者および患者のケアに携わる看護師への面接調査の結果をもとに、治療の選択・決定において患者がどのような状況にあるのか、また治療の選択・決定に際して看護師に求められる役割や支援について発表した。
2. 慢性創傷患者における創傷処置時の疼痛緩和を目指して一痛みを我慢している患者に焦点を当てて	共	2017年9月1日	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会（於神戸ポートピアホテル）	慢性創傷患者の処置時の疼痛を緩和するための方法を見出すために、創傷処置時の疼痛要因、疼痛状況、処置内容、鎮痛剤の使用状況を調査した。結果、対象者15名中11名が処置時に痛みを我慢しており、処置前の鎮痛剤使用率は36.4%と低く、適切なタイミングでの薬理的介入と個々の疼痛要因へ配慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：種村智香、宮本撰、布谷麻耶、川端京子
3. 小児科に通院している20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に対する思い	共	2017年9月1日	第48回日本看護学会慢性期看護学術集会（於神戸ポートピアホテル）	小児期に1型糖尿病を発症し20歳を超えて小児科通院する患者の移行期医療に対する思いを明らかにするために、自記式質問紙調査を行い、自由記載欄への回答を質的に分析した。結果、回答者の多くは診療科が変わることへの不安から主治医の変更を伴う転科を望んでおらず、小児科主治医による治療継続を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
4. 小児科に通院している20歳以上の1型糖尿病患者の医療費に対する負担感—自記式質問紙の自由記載より—	共	2017年7月16日	第23回日本小児・思春期糖尿病研究会年次学術集会（於品川グランドセントラルタワー）	希望していた。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：江尻加奈子、布谷麻耶、川端京子 小児科に1型糖尿病を発症し20歳を超えて小児科通院する患者の医療費に対する思いを明らかにするために、自記式質問紙調査を行い、自由記載欄への回答を質的に分析した。29名の回答を分析した結果、収入に対する医療費の割合の高さや医療費負担によるインスリン治療法の選択の制限などの意見がみられた。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：江尻加奈子、布谷麻耶、川端京子
5. 小児科外来に通院する20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に向けた準備状況	共	2017年5月20日	第60日本糖尿病学会年次学術集会（於名古屋）	小児科外来に継続して通院する20歳以上の1型糖尿病患者の移行期医療に対する患者自身の準備状況を把握するために、自己管理状況の達成度と移行期医療に関する要望や意見を問う質問紙調査を実施した。67名の回答を分析した結果、患者自身の1型糖尿病の自己管理状況の達成度は高かったが、HbA1cの目標達成状況は3割程度であった。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：江尻加奈子、布谷麻耶、川端京子
6. 慢性創傷患者における疼痛の質的評価—日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2 を用いて—	共	2017年3月24日	第15回日本フットケア学会年次学術集会（於岡山）	慢性創傷患者を対象に、日本語版Short-Form McGill Pain Questionnaire-2 (SF-MPQ-2) を用いて、平常時の状態での疼痛の質的評価を行った。結果、対象者は、平常時より持続的な痛みが強い複雑な疼痛を抱えていた。また、痛みの強い対象者では、侵害受容性慢性疼痛、神経障害性疼痛に関連した痛覚過敏やアロディニアの徴候が認められた。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：種村智香、宮本撰、布谷麻耶、川端京子
7. CDDPまたはCBDCA併用化学療法を受けた肺がん患者の遅発性悪心・嘔吐の実態調査	共	2017年10月22日	第55回日本癌治療学会学術集会（於パシフィコ横浜）	初回CDDPまたはCBDCA併用化学療法を受けた肺がん患者の、遅発性悪心・嘔吐の発現状況と食事摂取量や栄養状態との関連について検討するために、肺がん患者33名について治療開始前日から7日目までの悪心・嘔吐の有無、排便回数、食事摂取量、BMI、TP、Albをカルテより後向き観察研究で調査した。 本人担当部分：研究の全過程を担当 共同発表者：樽井亜紀子、川端京子、布谷麻耶、南裕美、工藤貴子、鈴木倫弘、光岡茂樹、渡邊徹也、川口知哉、平田一人
8. 化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者へのケアモデル案の作成と評価	共	2016年8月28日	日本家族看護学会学術集会（於山形）	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者に対するケアモデル案を作成し、その評価を行うことを目的に、まず国内外の文献検討を行い、33件を選択した。これらの論文結果および著者らの先行研究結果から、配偶者のケアに関する内容を抽出し、意味内容に応じてカテゴリ化し、ケアモデルの構成要素としてケアモデル案を作成した。次に、がん診療拠点病院の婦人科病棟に勤務する看護師を対象にグループインタビューを行い、ケアモデル案の妥当性と実用性を評価した。結果、ケアモデル案の内容の妥当性は認められたものの、配偶者に関わる機会の少なさが障壁となり、配偶者へ直接介入するケア項目の実践は困難なことが明らかとなった。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶、片岡純、小林珠美
9. 潰瘍性大腸炎患者の補完代替医療選択に関する意思決定	単	2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会（於北海道医療大学当別キャンパス）	潰瘍性大腸炎患者の補完代替医療を用いるか否かの意思決定プロセスを明らかにすることを目的に、Grounded Theory Approachを用いて、寛解期にある患者14名に半構造化面接を行い、継続比較分析を行った。結果、患者が補完代替医療を用いるか否かの意思決定プロセスは、「体調の良し悪し」の判断を起点とし、「セルフコントロール欲求と不信とのバランス」をいかにとるかに依っており、このバランスには「他者からの影響」と「補完代替医療の実行可能性」が影響していた。
10. クロウン病患者の疾患と運動の関連についての検討；自由記載の質的研究	共	2016年8月27日	第21回日本難病看護学会学術集会（於北海道医療大学当別キャンパス）	クロウン病患者の疾患と運動の関連について検討することを目的に、専門クリニックに通院するクロウン病患者に無記名自記式アンケート調査を行い、自由記載欄の記述内容を質的帰納的に分析した。結果、患者の考える運動の効果と運動の促進・阻害因子が明らかになった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：藤本悠、水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、市川奈央子、清水安子
11. クロウン病患者の運動習慣について	共	2016年7月10日	第7回日本炎症性腸疾患	クロウン病患者の運動習慣を明らかにし、症状と運

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ての実態調査		日	学会学術集会（於国立 京都国際会館）	動習慣との関連性を検討することを目的に、アンケートによる横断的調査を実施した。205部アンケートを配布し、196部の有効回答が得られた。運動群97名と非運動群98名を比較した結果、食欲の低下、腹痛、発熱の3項目において運動群が非運動群より有意に症状が少なかった。 本人担当部分：計画立案を担当。 共同発表者：水野光、瀬戸奈津子、布谷麻耶、藤本悠、市川奈央子、清水安子、阪上佳誉子、伊藤裕章
12. 卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者のSpiritual Needs	共	2015年9月6日	日本家族看護学会第22回学術集会（於国際医療福祉大学小田原保健医療学部）	卵巣がんの妻と死別した高齢配偶者が抱くSpiritual Needs を配偶者の語りから抽出することを目的に、配偶者2名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、「家族の健康を守りたい」「常に一緒にいたい」等の高齢配偶者が抱く5つのSpiritual Needs が抽出された。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：福田陽子、松井利江、布谷麻耶
13. 化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験する困難と対処	共	2015年9月6日	日本家族看護学会第22回学術集会（於国際医療福祉大学小田原保健医療学部）	化学療法を受ける壮年期婦人科がん患者の配偶者が体験している困難と対処を明らかにすることを目的に、配偶者10名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、配偶者が抱える7つの困難と9つの対処法が明らかになり、時間経過とともに現れる困難と対処法は異なっていた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶、片岡純
14. クロウン病者への行動分析的アプローチに基づく食事指導プログラムの効果	単	2015年7月25日	第20回日本難病看護学会学術集会（於東京都大田区産業プラザP10）	クロウン病者が症状の寛解を維持し、かつ食事満足度が向上することを目的に開発した食事指導プログラムに、病者の試し体験行動の形成から維持に至るまでの行動変容を導くため、行動分析的アプローチを基に修正を加え、その効果を検証した。結果、修正プログラムは、病者が病状を維持したまま試し体験行動を増加、継続するのに有効であり、食事満足度を向上させる効果も示された。
15. 炎症性腸疾患患者を対象としたセルフマネジメント介入の研究動向	単	2014年8月30日	第19回日本難病看護学会学術集会（於広島国際大学呉キャンパス）	炎症性腸疾患患者のセルフマネジメントに焦点を当てた介入研究の研究動向、介入効果や今後の課題について明らかにすることを目的として、32件の英語文献を分析した。結果、ここ10数年で本テーマに関する研究が増加していた。疾患に関する知識の習得や向上はいずれの介入でも効果がみられたが、知識の習得が患者のQOLや身体・心理的健康状態の改善には繋がっておらず、患者教育のあり方を見直す必要性が示唆された。
16. 「悪化した病状を抱えて生存する時期」における卵巣がん患者の配偶者の体験—遺族の語りからの分析—	共	2014年11月1日	第38回日本死の臨床研究会年次大会（於別府国際コンベンションセンタービーコンプラザ）	卵巣がん患者が「悪化した病状を抱えて生存する時期」における配偶者の体験を明らかにすることを目的に、配偶者（遺族）3名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、配偶者は、「少しでも長く妻に生きてほしい」という願いを軸に、「妻の死を意識する自分と向き合う」ことをしながら、「改めて夫婦であることを見つめる」ことを繰り返し、変化していく妻の病状に対応して「生活を再編する」体験をしていた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
17. 卵巣がん患者の配偶者が語る体験プロセスから見出されたもの	共	2013年11月1日	第37回日本死の臨床研究会年次大会（於くにびきメッセ）	卵巣がん患者の療養過程における配偶者の心理プロセスを明らかにすることを目的に、配偶者（遺族）3名に半構造化面接を行い、得られたデータを質的に分析した。結果、化学療法の効果が得られなくなった時期に夫は妻の病状の変化を感じ取り、化学療法に代わる新たな治療法を模索していた。また、病状の悪化する妻を支えることに専念するため、夫または子供が仕事を辞めていた。さらに、夫は身内や親しい医療関係者に相談して問題解決に取り組んでいた。 本人担当部分：計画立案、データ分析、結果のまとめを担当。 共同発表者：松井利江、福田陽子、布谷麻耶
18. クロウン病患者の食事満足度に関連する要因の分析	単	2012年8月1日	第17回日本難病看護学会学術集会（於セッション杉並）	クロウン病患者の食事満足度に関連する要因を属性要因、疾患要因、治療要因、及び行動要因から明らかにすることを目的に、寛解期にあつて自宅で生活する成人クロウン病患者115名を対象に質問紙調査を実施した。回答のあった37名のデータを分析した結果、クロウン病活動度が低いほど、また主観的重症度が低いほど食事の量的満足度が高く、同居家族があり、栄養剤からの摂取カロリーが少ないほど、また試し体験行動の頻度が多いほど食事の質的満足度

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
19. 周術期患者に対する寝衣交換の技術の教育効果	共	2011年8月1日	第37回日本看護研究学会学術集会(於パシフィック横浜)	<p>が高いことが明らかになった。さらに、1日の食事回数が多いほど食事の量的、質的満足度が高かった。</p> <p>成人看護学外科系実習において、術後疼痛があり輸液中の患者に対する寝衣交換の技術向上を図るために、実習初日に学内演習を実施するとともに、学生による自己評価及び教員等による他者評価を導入し、その効果を学生の自己評価の結果から検討した。学修達成度が「非常に・大体当てはまる」と自己評価した割合が75%以上の項目は、学内演習では9項目、術後患者に初めて寝衣交換を実施した際には0項目、実習終了時では19項目となり、この教育方法の有効性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。</p> <p>共同発表者：熊澤友紀、深田順子、吹田(布谷)麻耶、鎌倉やよい</p>
20. 地域高齢者におけるセルフ・メイドによる口腔ケアプログラムの開発	共	2011年12月1日	第31回日本看護科学学会学術集会(於高知文化プラザかるぼーと)	<p>高齢者がセルフ・メイドできる機能的口腔ケアプログラム案を開発し、その効果を検証することを目的とした。高齢者21名を無作為に介入群9名と対照群12名に分け、介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で嚥下機能、発話機能、呼吸機能を測定し比較した。その結果、介入群において呼吸機能の一つである最大吸気保持時間が1ヵ月後、2ヵ月後で有意に延長する効果が示された。</p> <p>本人担当部分：データ収集を担当。</p> <p>共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、熊澤友紀、百瀬由美子、布谷麻耶、藤野あゆみ、横矢ゆかり、米田雅彦</p>
21. 地域高齢者における器質的口腔ケアプログラムの効果	共	2010年9月1日	第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会(於新潟コンベンションセンター)	<p>高齢者の誤嚥性肺炎予防を目指す器質的口腔ケアプログラム案を開発し、その効果を検証することを目的とした。高齢者20名を対象にプログラムを適用し、その効果を介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で磨き残しの程度、唾液量、唾液中に含まれる細菌量、および口臭を測定し比較した。結果、プログラムの実施前後で1日の歯磨き回数が有意に増加し、磨き残しの合計得点が有意に低下した。唾液量、唾液中に含まれる細菌量、および口臭には実施前後で有意な変化は認められなかった。</p> <p>本人担当部分：データ収集を担当。</p> <p>共同発表者：鎌倉やよい、深田順子、熊澤友紀、百瀬由美子、吹田(布谷)麻耶、横矢ゆかり、米田雅彦</p>
22. 地域高齢者におけるセルフ・メイドの機能的口腔ケアプログラムの効果	共	2010年9月1日	第16回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会(於新潟コンベンションセンター)	<p>高齢者がセルフ・メイドできる機能的口腔ケアプログラム案を開発し、その効果を検証することを目的とした。高齢者21名を無作為に介入群9名と対照群12名に分け、介入前、1ヵ月後、2ヵ月後で嚥下機能、発話機能、呼吸機能を測定し比較した。その結果、介入群において呼吸機能の一つである最大吸気保持時間が1ヵ月後、2ヵ月後で有意に延長する効果が示された。</p> <p>本人担当部分：データ収集を担当。</p> <p>共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、熊澤友紀、百瀬由美子、吹田(布谷)麻耶、横矢ゆかり、米田雅彦</p>
23. 地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度の妥当性と信頼性の検討	共	2010年12月1日	第30回日本看護科学学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	<p>地域高齢者の保健行動に対する自己制御力をアセスメントする尺度の妥当性と信頼性を検討するために、高齢者20名を対象に口腔ケアプログラムを1ヵ月間実施し、実施前後に自己制御尺度を用いて調査を行った。結果、口腔ケアに関してセルフチェックができる高齢者は、自己制御尺度の合計得点が高いことから、自己制御尺度は自己制御の強度を示すうえで、10%の有意水準内での妥当性が示唆された。また、コンプライアンス、定期検診以外の保健行動については再テスト法による信頼性が確認された。</p> <p>本人担当部分：データ収集を担当。</p> <p>共同発表者：深田順子、鎌倉やよい、百瀬由美子、吹田(布谷)麻耶、熊澤友紀、横矢ゆかり、坂上貴之</p>
24. クロウン病患者の食事満足度に関連する要因の分析	共	2010年12月1日	第30回日本看護科学学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	<p>クロウン病患者の食事満足度に関連する要因を属性要因、疾患要因、治療要因、及び行動要因から明らかにすることを目的に、寛解期にあつて自宅で生活する成人クロウン病患者98名を対象に質問紙調査を実施した。回答のあつた22名のデータを分析した結果、クロウン病活動度が低いほど、また主観的重症度が低いほど食事の量的満足度が高いことが明らかになった。さらに、試し体験行動の頻度が多いほど食事の量的、質的満足度が高かった。</p> <p>本人担当部分：研究の全過程を担当。</p> <p>共同発表者：吹田(布谷)麻耶、鎌倉やよい、深田</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. 看護学実習における周術期患者へのフィジカルアセスメント技術教育の効果	共	2010年12月1日	第30回日本看護科学学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	<p>順子、熊澤友紀</p> <p>成人看護学実習において周術期患者に対するフィジカル・アセスメント能力が向上することを目的に、学生自身による評価と教員または病棟スタッフによる他者評価のフィードバックを行い、その教育効果を検討した。3年次生80名を対象とした結果、実習前、中、後で自己評価、他者評価ともに達成度の高い項目が8項目から9項目、最終的に24項目となり、この教育方法はフィジカル・アセスメント能力を向上させる可能性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、分析までを担当。</p> <p>共同発表者：熊澤友紀、深田順子、吹田(布谷)麻耶、鎌倉やよい</p>
26. PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた地域高齢者における口腔保健尺度の開発	共	2009年9月1日	第14回日本老年看護学会学術集会(於札幌コンベンションセンター)	<p>高齢者が自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階として高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにするために行ったフォーカス・グループ・インタビューの結果から7要因41項目からなる口腔保健行動尺度を開発し、高齢者及び40歳以上の同居家族の計1883名に質問紙調査を行った。回収された951名のデータを分析した結果、最終的に6要因25項目の尺度となった。</p> <p>本人担当部分：データ収集を担当。</p> <p>共同発表者：深田順子、百瀬由美子、鎌倉やよい、吹田(布谷)麻耶、森本紗磨美、藤野あゆみ、横矢ゆかり、坂上貴之</p>
27. クロウン病者がウェブ闘病記を書くことの意味	単	2009年8月1日	第14回日本難病看護学会学術集会(於前橋テルサ)	<p>クロウン病者にとってウェブ闘病記を書くことの意味を探求することを目的に、162件のサイトを対象に、開設者の属性、開設動向及び付加機能の利用状況、開設動機、形式と記述内容の4点について分析した。結果、開設者は30歳代の男性が多く、開設動機は「社会貢献」と同病者との「コミュニティの形成」が多かった。内容は、日々の自分の体調を書いたものが7割であった。以上より、ウェブ闘病記は病者にとって「健康状態のモニタリングツール」と「同病者との交流の場」として意味づけられていた。</p>
28. 地域高齢者の口腔保健行動－PRECEDE-PROCEEDモデルを用いた類型化－	共	2009年8月	第35回日本看護研究学会学術集会(於パシフィコ横浜)	<p>高齢者が主体的・自律的に取り組むことができる口腔ケアプログラムの開発を目指し、その第一段階として高齢者自身が行っている口腔保健行動の現状を質的に明らかにすることを目的にシニアクラブに所属する高齢者を対象にフォーカス・グループ・インタビューを行った。得られたデータをPRECEDEモデルを基に分類と抽象化を行い、介入の視点を検討した。</p> <p>本人担当部分：計画立案、データ収集、分析、結果のまとめまでを担当。</p> <p>共同発表者：吹田(布谷)麻耶、百瀬由美子、深田順子、森本紗磨美、横矢ゆかり、藤野あゆみ、鎌倉やよい</p>
29. クロウン病者の看護研究の動向	共	2007年7月	第12回日本難病看護学会学術集会(於青森県立保健大学)	<p>クロウン病者への看護の概況を明らかにすることを目的に、1983－2005年に発表されたクロウン病者の看護に関する原著論文77件を対象に、研究方法と内容について分析した。結果、入院中の1事例を対象とし、行った看護を振り返るかたちでの事例研究が大半であった。今後、事例研究を積み重ねるとともに、病者に共通した生活体験を知る視点、入院中だけでなく退院後の生活を含めた看護、ケアの有効性を科学的に検証する研究などの必要性が示唆された。</p> <p>本人担当部分：データの分析を担当。</p> <p>共同発表者：荒木しのぶ、吹田(布谷)麻耶、鈴木純恵</p>
30. クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験	共	2007年7月	第12回日本難病看護学会学術集会(於青森県立保健大学)	<p>クロウン病者の食事を通じた他者との関わりの体験を明らかにすることを目的にGrounded Theory Approachを用いて、成人クロウン病者17名に半構造化面接を行い、データを分析した。結果、病者の食事を通じた他者との関わりの体験は、病者が発病後、他者との食事の場で身近な者と美味しさを分かち合えない、食事を共にする相手に気を遣われるなどの心的負担感を感じながらも、試行錯誤しながら自分なりの対処法を見出し、確立していくプロセスが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：研究の全過程を担当。</p> <p>共同発表者：吹田(布谷)麻耶、鈴木純恵</p>
31. 在宅栄養法の普及に関する看護師の意識調査	共	2003年2月	第25回在宅経腸栄養研究会第17回在宅静脈栄養研究会合同集会(於パシフィコ横浜)	<p>在宅栄養法に関する臨床の看護師の意識を明らかにするために、無作為抽出した関西地区の18施設に勤務する看護師579名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、前回のA大学病院に勤務する看護師に行った調査結果と同様、栄養管理チームの認知度が低く</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
32. わが国の在宅栄養法の普及に関する要因について	共	2001年12月	第12回日本在宅医療研究会学術集会（於大阪大学コンベンションセンター）	、チーム医療が浸透していないこと、在宅栄養法において看護師が患者へのケアとして現状でできることと認識している役割との間にギャップがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、高木洋治 本邦において、欧米諸国に比べ在宅栄養法の普及が進んでいない要因が医療者、特に看護師に存在しているか否かを明らかにする目的で、A大学病院に勤務する看護師469名に質問紙調査を実施した。結果、要因として、栄養管理チームの認知度が低く、チーム医療が浸透していないこと、在宅栄養法において看護師がケアとして現状でできることと認識している役割との間にギャップがあり、患者・家族に十分なケアが提供されず、彼らが在宅療養を受け入れることを困難にしている恐れがあること、の2点が考えられた。 本人担当部分：研究の全過程を担当。 共同発表者：吹田（布谷）麻耶、福田祥子、高木洋治
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 患者さんも悩んでいます。IBD治療選択の実際と看護師の役割	単	2017年11月	第7回神戸ハーバー実践GIセミナー（於ラ・スイート神戸）	炎症性腸疾患の治療選択におけるShared Decision Makingの研究動向について、またこれまでにに行った患者および看護師への面接調査結果をもとに、炎症性腸疾患患者の生物学的治療選択の実際と患者の治療選択に際しての看護師の関与と求められる役割について発表した。
2. 第34回日本看護科学学会学術集会シンポジウムⅠ実践の課題を研究へー看護ケアプログラムの開発	共	2014年11月	第34回日本看護科学学会学術集会（於名古屋国際会議場）	看護ケアプログラムの開発についてのシンポジウムにおいて、これまでにに行ったクローン病患者への食事の自己記録を活用した食事支援プログラムの開発とその効果の検証結果について紹介するとともに、看護ケアプログラムを開発するにあたって、患者の行動変容を促し、それを持続させるための仕組みをどのように組み込むかについて参加者と共に討論を行った。 本人担当部分：シンポジストを担当
6. 研究費の取得状況				
1. 炎症性腸疾患患者へのe-ポートフォリオを用いたセルフケア支援プログラムの開発	共	2015年4月～2018年3月予定	学術研究助成基金助成金（挑戦的萌芽研究）	分担者
2. 炎症性腸疾患患者の治療法に関する意思決定支援モデルの構築	単	2015年4月～2018年3月予定	学術研究助成基金助成金（若手研究（B））	代表者
3. 壮年期の進行期婦人科がん患者の配偶者が体験する支援ニーズに基づくケアモデルの構築	共	2013年4月～2016年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））	分担者
4. 寛解と再発を繰り返す婦人科がん患者の家族の心理的プロセス—遺族への面接調査の分析から—	共	2012年～2014年	天理医療大学学内研究助成	分担者
5. クロウン病患者への行動分析的アプローチに基づく食事指導プログラムの開発と検証	単	2011年4月～2014年3月	学術研究助成基金助成金（若手研究（B））	代表者
6. クロウン病患者への食事栄養指導プログラムの開発と有効性の検証	単	2009年4月～2011年3月	学術研究助成基金助成金（研究活動スタート支援）	代表者
7. 医療・教育現場で真に役立つ自己制御尺度の開発と応用	共	2008年4月～2011年3月	学術研究助成基金助成金（基盤研究（B））	分担者
8. クロウン病者の食生活体験のプロセスに関する研究	単	2007年	公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金	代表者

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2017年8月23日～現在	Journal of Comprehensive Nursing Research and Care編集委員
2. 2016年4月～現在	兵庫県看護協会 兵庫県ナースセンター再就業支援研修 講師